

Children's Achievement in Relation to Their Way of Living

横山, 正幸
福岡教育大学第四部学校教育講座 (心理学系)

<https://doi.org/10.15017/9017>

出版情報 : 生活体験学習研究. 2, pp.41-45, 2002-07-31. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :



子どもの生活から学力問題を考える

横山 正幸

Children's Achievement in Relation to Their Way of Living

Yokoyama Masayuki

要旨 最近の子ども達の学力低下の背景には、学習意欲の低下があると考えられる。しかし、問題は学習意欲だけではない。生活全般に対して今の子ども達は、無気力で、しかも抑鬱的な傾向にさえある。これでは、学習時間数や学習内容を増やしても学力の顕著な向上は期待できない。このように子ども達の心が不健康なのはなぜだろうか。そこには、子どもの生活、特にそのなかでは極端に短い睡眠と、体を動かしての豊かな遊びの欠落が深く関係していると思われる。本論文では、こうした考えに基づき真の学力を高めるために我々大人は何をすべきか述べている。

キーワード 子どもの生活、学力、遊び、睡眠、抑鬱的傾向

1. 子ども達の学習意欲の低下

学校週5日制の全面実施による授業時間数の減少や学習内容の3割削減によって子ども達の学力が、ますます低下するのではないかという懸念の声が各方面からあがっている。これに対して、文部省は学習指導要領が示している基準はあくまでも最低基準であるとか、放課後の時間を活用した補充的な学習の必要性を示唆するなど、「ゆとりのなかで生きる力」と言いながら分裂的な態度をとっている(文部科学省、2002)。また、一部の学校や保護者の中には学習指導要領など全く無視し、ひたすら「学力」の向上に向かって従来どおり、いわゆる「つめこみ教育」を実践しているところもある。

しかし、それでよいのだろうか。学力問題を論じる際に忘れていることがある。それは子どもの視点である。学力の高低は、学習時間数や学習の内容に規定されているだけではない。学習の当事者である子どもの心理的な状態、特に学習意欲と深く関わっている。ど

んなに多くの時間をとり、高度な内容を、有能な教師が、効果的な方法で教えたとしても本人に学習しようとする意欲がなくては期待する成果を十分あげることにはできない。

この点に関して、貴重な資料がある。神奈川県藤沢市教育文化センター(2001)が中学3年生を対象に1965年から35年間にわたって学習意欲の実態を調べたものである。それによると、「もっと勉強したい」という子は、1965年には65.1%であった。それが1970年には58.7%、1980年には43.4%、1990年には36.9%、2000年には23.8%と年々低くなっている。反対に「勉強はもうしたくない」という子は、1965年には4.6%しかいなかった。それが1970年には8.6%、1980年には12.8%、1990年には21.5%、2000年には28.8%と4人に1人を占め、実に1960年の6倍近くに達している。明らかに子ども達の学習に対する意欲が低下してきているのである。これでは学習に興味をもてず、結果として学力の低下が起こるのは当然である。

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

福岡教育大学第四部学校教育講座(心理学系)(〒811-4192 宗像市赤間729-1)
729-1 Akama, Munakata City Fukuoka Pref., 811-4192 Japan

2. 精神衛生の悪い子ども達

さらに、子ども達は学習に対する意欲をなくしているだけではない。そもそも学校に行くことに対して近年ますます消極的になってきている。例えば、福岡教育大学児童心理学研究室（1983）が1982年に福岡市の小学6年生734名を対象に実施した調査では、「病気以外で学校に行きたくないと思ったり、実際に休んだことはありますか」という質問に対して「よく」「ときどき」を合わせて26.1%の子が「ある」と答えていた。それが、福岡県の宗像市教育委員会（1991）が1990年に6年生1014名を対象に実施した同様の調査では、56.1%の子が、そして1107名を対象としての1998年の調査（宗像市教育委員会、1999）では実に79.0%の子が「ある」と答えている。この数値は信じ難いほど高い。もちろん、この子ども達がすべて不登校になるわけではない。しかし、今日、不登校児が13万人を越えていることを合わせて考えると、上述の数値は、決して無関係と言えないだろう。

ところで、さらに目を向けなければならない深刻な問題がある。それは、子ども達の意欲や興味・関心が学習や学校に対してのみ低くなっているわけではないという事実である。現代の子ども達についてかなり前から三無主義ということが言われてきた。すなわち、無気力、無関心、無感動だということである。実際、宗像市教育委員会（1999）が行った1998年調査では、「何もしたくなと思うことがあるか」という質問に対して「よく」「ときどき」を合わせて6年生の81.8%が「ある」と答えている。これは、1990年の調査では69.1%であった。生活全般に対して無気力な傾向があるのである。しかも、精神衛生が非常に悪い状態にある。例えば、次のようなデータがある。

- 「おもいっきり暴れまわりたいと思うことがある」
子：小学5、6年生で44.5%（連合総合生活研究所、1997）
- 「むしゃくしゃして、ものや道具や建物を傷つけたり、こわしたりすることが『よく』『時々』ある」子：小学5年生で25.2%（北九州市教育委員会、2000）
- 「友達にイライラしたり、むかつくことが『よく』『時々』ある」子：小学5年生で71.1%（北九州市教育委員会、2000）

- 「生まれなければよかったと思うことが『よく』『時々』ある」子：小学5年生で38%（盛岡市教育研究所、1997）
- 「生きているのがイヤになるという感じが『よく』『時々』ある」子：小学6年生で40.0%（福岡県生活労働部青少年課、2000）
- 「朝、食欲がない」子：小学5、6年生で46.2%（連合総合生活研究所、1997）
- 「夕ご飯を食べたくないことが『よく』『時々』ある」子：小学4年生で71.1%（宗像市教育委員会、1991）
- 「とても疲れたと思うことが『よく』『時々』ある」子：小学5、6年生で83.2%（福岡県青生活労働部青少年課、2002）
- 「よく眠れないことが『よく』『時々』ある」子：小学4年生で84.6%（宗像市教育委員会、1991）
- 「何もしたくなと思うことが『よく』『時々』ある」子：小学5、6年生で68.7%（福岡県青生活労働部青少年課、2002）
- 「自分は何をやってもダメな人間だという感じが『よく』『時々』ある」子：小学6年生で48.4%（福岡県生活労働部青少年課、2001）

無論、こうした子ども達がすべて不適応を起こしたり、問題行動にはしったりするというわけではない。しかし、今日の青少年の様々な問題がこうした心の状態と決して無縁でないことは確かであろう。これでは、大切な子ども時代があまりにも淋し過ぎる。また、子ども達のもっている可能性も実現し難いことになりかねない。

なぜ、子ども達はこんなにも無気力化し、悶々としているのであろうか。不登校やいじめ、暴力行為などについて多様な要因が複雑に絡み合っただけの結果だと説明している専門家が少なくない。本当にそうだろうか。その見解が正しいなら「治療」はほとんど不可能だということになる。

しかし、実際にはそうではない。生活リズムを適性にしたり、生活体験や人間関係体験を豊かにすることによって状態が好転した事例は数多くある。このことは、多様な要因ではなく、幼い時からの子どもの生活のあり方という一つの要因に集約することができるということである。生活は、いくつかの側面に分けて見

ることができる。その中で、今、特に子ども達の心の問題を考える時、目を向けたいことは睡眠と遊びである。

3. 問題の原因

(1) 睡眠不足の子ども達

まず、睡眠について述べてみよう。人間は生物である。1000年や2000年でその生理的メカニズムが変化するわけではない。いつの時代でも健康な心身を維持していくためには年齢相応に十分な睡眠をとることが必要である。幼児心理学者の山下俊郎(1966)によると、昔(1937当時)の幼児の就寝時刻は、4歳で7時53分、5歳で8時3分、6歳で8時16分であった。ところが今では、5歳児で9時以降に寝ている子が86.3%、10時が31.2%となっている(北九州市教育委員会、2000)。

また、松本淳治(1993)の資料によると、10~13歳に必要な睡眠時間は10時間だという。実際、園原太郎ら(1952)の調査によると、1947年当時の6年生の平均睡眠時間は男子10時間25分、女子10時間9分と10時間を越えていた。それが1990年の6年生では8時間16分(宗像市教育委員会、1991)と2時間も短くなっている。当然、就寝時刻は遅い。北九州市教育委員会(2000)の調査では、小学5年生で就寝時刻が10時以降という子が82.3%にも達している。11時以降では38.2%である。

学校の始まる時間は昔も今もそんなに変わってはいない。8時30分までに行かなければならないとすれば、遅くとも7時までには起きなければならない。上述のような遅い就寝では、当然の結果として睡眠時間が足りなくなる。これでは朝から頭がすっきりしない。イライラし、食もすすまない。学校に張り切って行くという気分には到底なれないだろう。福岡県生活労働部青少年課(2001)の調査によると、学校に行きたくないと感じたことのある子は6年生で、82.3%いる。そして、その理由として圧倒的に多いのが「体の疲れや、睡眠不足」で、56.6%にも達している。同様のことは、法務省人権擁護局(1995)の行った中学生を対象としての調査からも知ることができる。それによると、学校に行きたくないと思ったことのある子は全体の43.4%で、その理由として51.2%の子が「朝、起きる

のがつらかったから」と答えている。こうした気持ちで学校へ行き、授業に臨んでも意欲的に瞳を輝かせて学習できないのは十分予想されることである。こうした睡眠不足の生活が小学生や中学生になって初めて始まるのではない。幼い時から続いているのである。このような子どもの状態を考えると、学習時間を増やし、学校環境を整え、学習内容を豊かにし、有能な教師が意欲的に情熱をもってわかりやすく教えたとしても、今や限界があると言わざるを得ない。

(2) 遊びのない子ども達の生活

生活の問題としてもう一つの大きな面は、これまでも多くの実態調査が明らかにしている遊びの衰退である。子どもの遊びには、楽しさを与えてくれると同時に次のような発達的な意味がある。

- ①社会性、協調性、人間関係能力などを育む。
- ②生きた知識、生活の知恵を育む。
- ③体力・運動能力・器用さを育む。
- ④自主性、耐性、創造性、思いやりの心などを育む。
- ⑤心の緊張を解消し、精神衛生をよくする。

異年齢の仲間との活動的な遊びには社会性、耐性を育むなど様々な発達的な効用があるが、忘れてならないのはストレスを解消する働きがあることである。子どもだって悲しいこと、腹のたつこと、不安なことなど色々ある。しかし、時間を忘れ、夢中になって友達と遊ぶなかでそれらを解消し、元気を復活させるのである。

ところが、この大切な遊びが今や「無遊病の子ども達」とか「巣ごもりする子ども達」と言われるように、子どもの生活から完全に抜け落ちてしまった。大都会はもちろん自然豊かな農村部に行っても子ども達の遊ぶ声を聞くことはまずない。もちろん、今の子ども達も全く遊んでいないわけではない。室内で一人でテレビを見たり、テレビ・ゲームなどして過ごしている子はいっぱいいる。問題は、外で大勢の仲間達と活動的な遊びをしている子がほとんどいない点である。例えば、青少年文化研究会(1996)が小学5年生を対象に行った調査によると、「昨日、友達と外で遊んだ」かどうか尋ねた質問に対して男子の62.7%、女子の69.0%

が「ほとんどしなかった」と答えている。

幼児教育の権威、平井信義（1989）は「当時（1947年頃）の子どもたちのいきいきした活動を思い返すと、昨今の幼稚園や保育所の子どもたちの姿は、じいさんか婆さんのように思えることさえある。」（「新しい幼児教育のために」と述べている。幼児でさえこうである。エネルギーに満ちているギャング・エイジの子ども達の状態は悲惨でさえある。子ども達が仲間と夢中になって遊び、心から笑ったり、怒ったりする表情を見ることはめったにない。

親や教師による過保護、あるいは過剰に管理的な関わりの中、遊ぶ意欲さえなくしているのである。しかも異年齢での遊びがなくなったために遊び方の継承がなされていない。そのため時間があっても、仲間がいても、場所があっても今の子ども達は自分達で遊ぶことができない。ちなみに小塩節（1997）によると、東京の戦前の子ども達は4000種類の遊びを知っていたという。それが今や20種類だという。実際、ベネッセコーポレーション（1999）の調査によると、石けりをほとんどしたことのない子が小学5、6年生で79.7%、ゴムとびについては84.5%もいる。そして、何をして遊んだらよいかわからないことが「よくある」「ときどきある」子が38.7%であった。

このように子ども達は遊ぶ時には思いっきり遊ぶという「当り前の生活」が保障されていないのである。結果として、ストレスが発散できず、イライラしたり、生きてる実感が持てなくなるのは当り前である。体を十分動かしていないから、食欲もなく、寝つきも悪くなり、上述の睡眠の問題と連動する。当然、色々なことに対する意欲も低下する。ましてや楽しくない勉強に前向きになれるはずはない。

さらに、言及しておくべきことがある。それは、子ども達が学校に引き付けられる最大の理由は、勉強ではなく、そこに友達がいるからだということである。例えば、宗像市教育委員会（1999）の調査では、学校に行くのが楽しいと答えている6年生の90.4%が「友達がいるから」と答えている。「勉強がおもしろいから」は2.7%に過ぎない。また、法務省人権擁護局（1995）の調査では、学校に行きたくないと思ったことのある中学生の59.4%がクラスに親しい友達がいないと答えている。友達は机を並べて一緒に勉強していればでき

るものではない。特に小学生は、一緒に夢中になって遊ぶなかでできるものである。その遊びが希薄だとすれば、心を許す友達はできず、学校は当然魅力に乏しいものとなる。

4. 私たちの課題

では、子ども達が学校好きになり、しかも勉強に意欲的になるようにするにはどうしたらよいのであろうか。それには、まず、笑顔の輝く子どもにすることである。生活全体に対して意欲的な子どもにすることである。そのためにすべきことは何だろうか。答えは簡単である。子ども達に十分な睡眠時間と、仲間との豊かで活動的な遊びを保障することである。それには、まず、親や教師が子どもの健康な生活と健やかな発達にとって睡眠と遊びが不可欠の条件であることをしっかり理解しなければならない。そして、睡眠については、子どもが早寝早起きのできるよう生活のあり方を見直し、強い意志をもって寝るべき時間に寝せるしつけをすることである。

なお、小児科医や保健婦などで構成する日本小児保健協会の学校保健委員会（2001）は、昨年、子ども達の睡眠問題の状況を改善するために、学会誌「小児保健研究」で「子どもの睡眠に関する提言」を行っている。

遊びについては、学校週5日制によって生み出された土、日、2日間の自由時間を積極的に活用することである。そのためには子ども達が集まって遊ぶ場所と、遊び方を知らない子ども達の遊びを支援するボランティアが必要である。こうした条件をクリアするためには、当事者である親が人任せではなく、まず自ら行動すること、そして地域の人々の幅広い理解と協力が不可欠である。こうした取り組みの具体的な例としては、現在、福岡県が県民運動としてすすめている「アンビシャス広場」の活動が参考になるだろう（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2002）。アンビシャス広場というのは、放課後や休日、そこに行けば友達がおりに、遊びがある、そして子ども達を温かく見守り、遊びを支援してくれるおじちゃんやおばちゃんがいる、そんな場のことである。公民館や集会所、学校の空き教室などがアンビシャス広場として活用されている。

また、子どもの遊びを活性化する方法としては、学校の昼休みの時間を活用するやり方もある。福岡県宗像市のある小学校では、昼休みの時間を若干長くした。そして、近くの大学の学生数名が毎日ボランティアとして子ども達の中に入り、積極的に彼らと遊ぶようにした。その結果、子ども達の遊びも仲間関係も豊かなものになっていった(横山正幸、2000)。方法は色々ある。いずれにしても早急に確かな戦略を立てて具体的に実践していく求められる。

引用文献

小塩 節 1997 遊ぶ子の美しさ 教育と情報、No. 470、2-5、第一法規出版
 神奈川県藤沢市教育文化センター 2001 学習意識調査報告書 (2000年度版)
 北九州市教育委員会 2000 北九州市家庭教育意識調査
 青少年文化研究会 1996 子どもたちの生活世界 伊藤忠記念財団調査研究報告書 No.30
 園原太郎他 1952 学童の生活時間に関する調査 京都大学文学部研究紀要、第一、131-171.
 日本小児保健協会学校保健委員会 2001 子どもの睡眠に関する提言 小児保健研究、第60巻、第6号、817-819.
 平井信義 1989 新しい幼児教育のために 新曜社
 福岡教育大学児童心理学研究室 1983 現代っ子の生活意識に関する実態調査

福岡県青少年アンビシャス運動推進室 2002 平成13年度アンビシャス広場 活動事例集
 福岡県生活労働部青少年課 2002 子ども遊び意識調査報告書
 福岡県生活労働部青少年課 2001 青少年に関する意識及び行動調査
 ベネッセ教育研究所 1999 子どもたちの遊び モノグラフ・小学生ナウ、Vol.19-1、ベネッセコーポレーション
 法務省人権擁護局 1995 中学生の生活に関するアンケート調査結果報告書
 松本淳治 1993 「寝る子は育つ」を科学する 大月書店
 宗像市教育委員会 1991 宗像市の小学生の生活と意識の実態
 宗像市教育委員会 1999 宗像市の小学生の生活と意識の実態
 盛岡市教育研究所 1997 社会環境が子供たちに与える影響についての調査 (西日本新聞 1997年2月2日 (朝刊) による)
 文部科学省 2002 確かな学力向上のための2002アピール「学びのすすめ」
 山下俊郎 1966 改訂幼児心理学 朝倉書店
 横山正幸 2000 学校生活を楽しくする校庭遊びのすすめ 青少年問題、第47巻、第5号、10-16.
 連合生活総合研究所 1996 生活時間調査 (西日本新聞 1996年10月2日 (朝刊) による)

